日比谷潤子

国際基督教大学名誉教授

撮影◎戸川覚

日本唯一の本格的リベラルアーツ大学、国際基督教大学（ICU）は2008年に世界基準の大学を目指して教学改革を行った。その計画の責任者として今に至る新生ICUの道を拓いたのが、前学長の日比谷潤子氏である。

上智大学を卒業し、米国ペンシルベニア大学大学院で言語学博士課程を修め、慶應義塾大学で教職を得て日本語教育に15年携わった。自身の専門である言語学のポジションの募集がICUであったことから異動。これで研究に専念できると思っていたが、同大の教学改革委員に選ばれ、他大学での経験が生かせるなら と引き受ける。すると、その活躍ぶりが評価されて教学改革本部長を要請される。さらに自分たちで進めた新しいシステムを実際に動かしたいという思いに駆られて副学長、学長を引き受け、務め上げた。何ごとに対しても真摯で真剣。そして、その人柄は気さくで明るくポジティブ。「より開かれたところ、より広い世界へ」というのが自分にとっての関心だったし、今もそう。過去を振り返ってばかりでは新しいことができませんから」

専門である言語学の域に留まらない取り組みで日比谷氏が育成してこられた多くの人財。彼ら彼女らがグローバル社会で活躍していくことに期待が寄せられる。

多言語でバランス感覚を磨き、早くから世界を意識するグローバル人財を育てる

国際基督教大学（ICU）前学長の日比谷潤子氏。18年にわたる同大学在職中は教職のほかに教学改革委員、同本部長という大役を務め、従来の6学科制を廃して31からなるメジャー（専修分野）制の導入を実現し、時代を見据えた新しいプログラムを採用した。さらに学長として入学者選抜方法を改めるなど、新生ICUの道を整えた。多様な視点を持ち、大学教育に長年携わってこられた日比谷氏に、ICUの教学改革の内容、日本の大学教育への提言、そしてグローバル人財を育成するためのアイデアを伺った。

大学院時代の「出会い」から米国留学を経て教育者の道へ

伊藤　日比谷さんは上智大学のご出身で、2012年から2020年までICUの学長をお務めになった後、現在は学校法人聖心女子学院常務理事、日本学術会議副会長という要職に就いていらっしゃいます。まずは教育者の道に進まれた経緯からお話を伺いたいと思います。

日比谷　私は子どもの頃から勉強や読書がすごく好きだったんですね。その中でも特に英語が好きで、熱心に取り組んでいました。「大学では別の言語を」と思い、上智大学外国語学部のフランス語科を選びました。1980年に同学部を卒業しているのですが、当時は男女雇用機会均等法といった時代ではありませんでした。それで研究者、大学教員になるのが良いかなと。それほど確固たる意志を持っていたわけではないものの、とにかく上智大学大学院に行くことにしたわけです。2年で修士号を取得して、さらに1年間博士課程に在籍しました。言語学の勉強を本格的に始めたのは大学院に入ってから で、1年目の最初の学期に社会言語学なる分野と出会いました。いろいろ学ぶうちに「これはどうもアメリカの特定の先生のところに行ったほうが良いらしい」ことに気付きました。

1982年の夏、国際言語学者会議の大会が東京で開かれ、世界から教科書等で名前を知っているような著名な言語学者が大挙して来日しました。そこでいろいろな仕事をするのに首都圏の大学院生がアルバイトとして集められて1週間近く詰めたのですが、その頃すでに私はアメリカ留学の準備を進めていたこともあり、大いに刺激を受けました。翌年の1983年夏、奨学金を得て米国のペンシルベニア大学大学院入学が叶いました。

伊藤　語学の才能がある方は、まず外国語自体が好きというのがあるのでしょうね。

日比谷　外国語を学ぶこと自体、好きでしたが、私は中学生ぐらいから言語の構造に関心があったのです。